

# 或日の大石内蔵助

芥川龍之介

青空文庫



立てきつた障子しょうじにはうららかな日の光がさして、嵯峨さかたる老

木の梅の影が、何間なんげんかの明あかるみを、右の端から左の端まで画の如

く鮮あざやかに領あさしている。元あさのたくみのかみ浅野内匠頭家来、当時細川家ほそかわけに御預り

中の大石内蔵助良雄は、その障子を後うしろにして、端然と膝を重

ねたまま、さつきから書見に余念がない。書物は恐らく、細川家

の家臣の一人が借してくれた三国誌の中の一冊であろう。

九人一つ座敷うちにいる中で、片岡源五右衛門かたおかげんごえもんは、今し方廁かわやへ立つ

た。早水藤左衛門はやみとうぎえもんは、下の間しもまへ話しに行つて、未いまだにここへ帰らな

い。あとには、吉田忠左衛門よしだちゆうざえもん、原惣右衛門はらそうえもん、間瀬久太夫ませきゆうだゆう、小

野寺十内のでらしじゆうない、堀部弥兵衛ほりべやへえ、間喜兵衛はざまきへえの六人が、障子にさしている

日影も忘れたように、あるいは書見くまひに耽ふけつたり、あるいは消息を認したためたりしている。その六人が六人とも、五十歳以上の老人ばかり揃そろつていたせいか、まだ春の浅い座敷の中は、肌寒いばかりにもの静しずかである。時たま、しわぶきの声をさせるものがあつても、それは、かすかに漂ただよっている墨の匂においを動かすほどの音さえ立てない。

内蔵助くらのすけは、ふと眼を三国誌からはなして、遠い所を見るような眼をしながら、静に手を傍かたわらの火鉢の上にかざした。金網かなあみをかけた火鉢の中には、いけてある炭の底に、うつくしい赤いものが、かんがりと灰を照らしている。その火気を感じると、内蔵助の心には、安らかな満足の情が、今更のようにあふれて来た。丁度、

去年の極ごくげつ月十五日に、亡君の讐あだを復して、泉岳寺せんがくじへ引上げた時、彼みづか自ら「あらたのし思いははるる身はすつる、うきよの月にかかる雲なし」と詠じた、その時の満足が帰つて来たのである。

赤穂あこうの城を退去して以来、二年に近い月日を、如何いかに彼は焦慮と画策かくさくとの中うちに、費ついした事やであろう。動やもすればはやり勝ちな、一党かつきの客氣こうせいを控おもむろ制して、徐おもむろに機の熟するのを待さつただけでも、並大抵なみたいていな骨折りではない。しかも讐家しゅうかの放ほうつた細さい作さくは、絶えず彼の身辺うかがを窺うかがっている。彼は放埒ほうらつを装まつて、これらの細作の眼を欺くと共に、併せてまた、その放埒ほうらつに欺かれた同志の疑惑をも解かなければならなかつた。山科やましなや円まる山やまの謀議の昔を思い返せば、当時の苦衷が再び心の中によみ返つて来る。——しか

し、もうすべては行く処へ行きついた。

もし、まだ片のつかないものがあるとすれば、それは一党四十七人に対する、公儀こうぎの御沙汰ごさただけである。が、その御沙汰があるのも、いずれ遠い事ではないのに違いない。そうだ。すべては行く処へ行きついた。それも単に、復讐の挙が成就じょうじゆしたと云うばかりではない。すべてが、彼の道德上の要求と、ほとんど完全に一致するような形式で成就した。彼は、事業を完成した満足を味つたばかりでなく、道德を体现した満足をも、同時に味う事が出来たのである。しかも、その満足は、復讐の目的から考えても、手段から考えても、良心の疚やましさに曇らされる所は少しもない。彼として、これ以上の満足があり得ようか。……

こう思いながら、内蔵助くららのすけは眉をのべて、これも書見に倦うんだのか、書物を伏せた膝の上へ、指で手習いをしていた吉田忠左衛門に、火鉢のこちらから声をかけた。

「今日は余程暖いようですね。」

「さようでございます。こうして居りましても、どうかすると、あまり暖いので、睡ねむけ気がさしそうでなりません。」

内蔵助は微笑した。この正月の元旦に、富森助右衛門とみのもりすけえもんが、三杯の屠蘇とそに酔って、「今日も春恥しからぬ寝武士かな」と吟じた、その句がふと念頭に浮んだからである。句意も、良雄よしかつが今感じている満足と変りはない。

「やはり本意を遂とげたと云う、気のゆるみがあるのでございま

よう。」

「さようさ。それもありましょう。」

忠左衛門は、手もとの煙管をとり上げて、つつましく一服の煙を味った。煙は、早春の午後をわずかにくゆらせながら、明い静かさの中に、うす青く消えてしまう。

「こう云うのどかな日を送る事があるうとは、お互に思いがけなかつた事ですからな。」

「さようでございます。手前も二度と、春に逢おうなどは、夢にも存じませんでした。」

「我々は、よくよく運のよいものと見えますな。」

二人は、満足そうに、眼で笑い合った。——もしこの時、良雄

の後の障子に、影法師が一つ映らなかつたなら、そうして、その影法師が、障子の引手ひきてへ手をかけると共に消えて、その代りに、早水藤左衛門の逞しい姿が、座敷の中へはいつて来なかつたなら、良雄はいつまでも、快い春の日の暖さを、その誇らかな満足の情と共に、味わう事が出来たのであろう。が、現実には、血色の良い藤左衛門の両頬に浮んでいる、ゆたかな微笑と共に、遠慮なく二人の間へはいつて来た。が、彼等は、勿論それには気がつかない。

「大分下だいぶしもの間は、賑かなようですな。」

忠左衛門は、こう云いながら、また煙草たばこを一服吸いつけた。

「今日の当番は、伝右衛門殿でんえもんですから、それで余計話はずむのでしょう。片岡なども、今し方あちらへ参つて、そのまま坐りこ

んでしまいました。」

「道理こそ、遅いと思ひましたよ。」

忠左衛門は、煙にむせて、苦しそうに笑つた。すると、頻しきりに筆を走らせていた小野寺十内が、何かと思つた気色けしきで、ちよいと顔をあげたが、すぐまた眼を紙へ落して、せつせとあとを書き始める。これは恐らく、京都の妻女へ送る消息でも、認したためていたものであろう。——内蔵助も、眦まなじりの皺しわを深くして、笑いながら、

「何か面白い話でもありましたか。」

「いえ。あいかわらず不相変あいかわらずの無駄話ばかりでございます。もつとも先刻、

近松ちかまつが甚三郎じんざぶろうの話わを致した時には、伝右衛門殿でんえもんなども、眼に涙をためて、聞いて居られましたまが、そのほかは——いや、そう

云えば、面白い話がございました。我々が吉良殿を討取つて以来、江戸中に何かと仇討あだうちじみた事が流行はやるそうでございます。」

「ははあ、それは思いもありませんな。」

忠左衛門は、げげんな顔をして、藤左衛門を見た。相手は、この話をして聞かせるのが、何故なぜか非常に得意らしい。

「今も似よりの話を二つ三つ聞いて来ましたが、中でも可笑おかしかったのは、南八丁堀みなみはつちようぼりの湊町みなとちよう辺にあつた話です。何でも

事の起りは、あの界隈かいわいの米屋の亭主が、風呂屋で、隣同志の紺屋の職人と喧嘩をしたのですな。どうせ起りは、湯がはねかつたとか何とか云う、つまらない事からなのでしょう。そうして、その揚句あげくに米屋の亭主の方が、紺屋の職人に桶で散々なぐ撲られたのだ

そうです。すると、米屋の丁稚でつちが一人、それを遺恨いこんに思つて、暮くれがた方その職人の外へ出る所を待伏せて、いきなり鉤かぎを向うの肩へ打ちこんだと言うじやありませんか。それも「主人の讐かたき、思い知れ」と云いながら、やったのだそうです。……」

藤左衛門は、手真似をしながら、笑い笑い、こう云つた。

「それはまた乱暴至極ですな。」

「職人の方は、大怪我おおおけがをしたようです。それでも、近所の評判は、その丁稚でつちの方が好よいと云うのだから、不思議でしょう。そのほかまだその通とおりちよう町三丁目にも一つ、新麴しんこうじまち町の二丁目にも一つ、それから、もう一つはどこでしたかな。とにかく、諸方にあるそうです。それが皆、我々の真似だそうだから、可笑おかしいじやあり

ませんか。」

藤左衛門と忠左衛門とは、顔を見合せて、笑った。復讐の拳が江戸の人心に与えた影響を耳にするのは、どんな些事さじにしても、快いに相違ない。ただ一人内蔵助くらのすけだけは、僅に額へ手を加えたまま、つまらなそうな顔をして、黙っている。——藤左衛門の話は、彼の心の満足に、かすかながら妙な曇りを落させた。と云つても、勿論彼が、彼のした行為のあらゆる結果に、責任を持つ気でいた訳ではない。彼等が復讐の拳を果して以来、江戸中に仇討が流行した所で、それはもとより彼の良心と風馬牛ふうばぎゆうなのが当然である。しかし、それにも関らず、彼の心からは、今までの春の温ぬくもりが、幾分か減却したような感じがあつた。

事実を云えば、その時の彼は、単に自分たちのした事の影響が、意外な所まで波動したのに、聊か驚いただけなのである。が、ふだんの彼なら、藤左衛門や忠左衛門と共に、笑つてすませる筈のこの事実が、その時の満足しきつた彼の心には、ふと不快な種を蒔く事になった。これは恐らく、彼の満足が、暗々の裡に論理と背馳して、彼の行為とその結果のすべてとを肯定するほど、虫の好い性質を帯びていたからであろう。勿論当時の彼の心には、こう云う解剖的な考えは、少しもはいつて来なかつた。彼はただ、春風の底に一脈の氷冷の気を感じて、何となく不愉快になつただけである。

しかし、内蔵助の笑わなかつたのは、格別二人の注意を惹か

なかつたらしい。いや、人の好い藤左衛門の如きは、彼自身にとつてこの話が興味あるように、内蔵助にとつても興味があるものと確信して疑わなかつたのであろう。それでなければ、彼は、更に自身下の間しもへ赴いて、当日の当直だつた細川家の家来、堀内伝右衛門を、わざわざこちらへつれて来などはしなかつたのに相違ない。所が、万事にまめな彼は、忠左衛門かえりみを顧て、「伝右衛門殿をよんで来ましよう。」とか何とか云うと、早速隔ての襖ふすまをあけて、気軽く下の間へ出向いて行つた。そうして、ほどなく、見た所から無骨ぶこつらしい伝右衛門を伴なつて、不相変あいかわらずの微笑をたたえながら、得々とくとくとして歸つて来た。

「いや、これは、とんだ御足労を願つて恐縮でございますな。」

忠左衛門は、伝右衛門の姿を見ると、良雄よしかつに代つて、微笑しながらこう云つた。伝右衛門の素朴で、真率しんそつな性格は、お預けになつて以来、夙つとに彼と彼等との間を、故旧こきゆうのような温情でつないでいたからである。

「早水はやみづ氏が是非こちらへ参れと云われるので、御邪魔とは思ひながら、罷りまか出ました。」

伝右衛門は、座につくと、太い眉毛を動かしながら、日にやけた頬の筋肉を、今にも笑い出しそうに動かして、万遍なく一座を見廻した。これにつれて、書物を読んでいたのも、筆を動かしていたのも、皆それぞれ挨拶あいさつをする。内蔵助もやはり、慇懃いんぎんに会釈をした。ただその中で聊いささか滑稽の観があつたのは、読みかけ

た太平記を前に置いて、眼鏡をかけたまま、居眠りをしていた堀部弥兵衛が、眼をさますが早いか、慌ててその眼鏡をはずして、丁寧ようすに頭を下げた容子である。これにはさすがな間喜兵衛も、よくよく可笑おかしかつたものと見えて、傍かたわらの衝立ついたての方を向きながら、苦しそうな顔をして笑をこらえていた。

「伝右衛門殿も老人はお嫌いだと見えて、とかくこちらへはお出いでになりませんか。」

内蔵助は、いつに似合わない、滑なめな調子で、こう云つた。幾分か乱されはしたものの、まだ彼の胸底には、さっきの満足の情が、暖く流れていたからであろう。

「いや、そう云う訳ではございませんが、何かとあちらの方かたがた々々

に引とめられて、ついそのまま、話しこんでしまうのでござい  
ます。」

「うけたまわ今も承れば、だいぶ大分面白い話が出たようでございませぬ。」

忠左衛門も、かたわら傍から口を挟はさんだ。

「面白い話——と申しますと……」

「江戸中あだうちで仇討あだうちの真似事が流行はやると云う、あの話でございませぬ。」

藤左衛門は、こう云つて、伝右衛門と内蔵助くらのすけとを、にこにこしながら、等分に見比べた。

「はあ、いや、あの話でございませぬか。人情と云うものは、実に妙なものでございませぬ。御一同の忠義に感じると、町人百姓まで

そう云う真似がして見たくなるのでございましょう。これで、どのくらいじだらくなじようげ上下の風俗が、改まるかわかりません。やれ浄瑠璃じようるりの、やれ歌舞伎のと、見たくもないものばかり流行はやっている時でございますから、丁度よろしゅうございます。」

会話の進行は、また内蔵助にとって、面白くない方向へ進むらしい。そこで、彼は、わざと重々しい調子で、卑下ひげの辞を述べながら、巧たくみにその方向を転換しようとした。

「手前たちの忠義をお褒ほめ下さるのは難ありがた有いが、手前一人ひとりの量見では、お恥しい方が先に立ちます。」

こう云つて、一座を眺めながら、

「何故かと申しますと、赤穂一藩に人も多い中で、御覽の通りこ

ここに居りまするものは、皆しょうしんもの小身者ばかりでございませぬ。もつとも最初は、奥野おくのしょうげん将監などと申す番頭ばんがしらも、何かと相談にのつたものでございませぬが、中ごろから量見を変え、ついに同盟を脱しましたのは、心外と申すよりほかはございませぬ。そのほか、しんどうげんしろう新藤源四郎、かわむらでんびようえ河村伝兵衛、こやまげんござえもん小 sources 五左衛門などは、原惣右衛門より上席でございませぬし、ささこござえもん佐々小左衛門なども、吉田忠左衛門より身分は上でございませぬが、皆一挙が近づくとつれて、変心致しました。その中には、手前の親族の者もございませぬし。し

て見ればお恥しい気のするのにも無理はございませぬまい。」

一座の空気は、内蔵助のこの語ことばと共に、今までの陽気さをなく

なして、急に真面目まじめな調子を帯びた。この意味で、会話は、彼の

意図通り、方向を転換したと云つても差支えない。が、転換した方向が、果して内蔵助にとつて、愉快なものだったかどうかは、おのずか自らまた別な問題である。

彼の述懐を聞くと、まず早水藤左衛門は、両手にこしらえていた拳げんこつ骨を、二三度膝の上にこすりながら、

「彼奴等きやつらは皆、揃もいも揃もつた人畜にんちく生しょうばかりですな。一人として、武士の風かざかみ上かみにも置けるような奴は居りません。」

「さようさ。それも高田群兵衛たかたぐんべえなどになると、畜生より劣つています。」

忠左衛門は、眉をあげて、賛同を求めするように、堀部弥兵衛を見た。慷慨こうがい家の弥兵衛は、もとより黙つていない。

「引き上げの朝、彼奴きやつに遇あつた時には、唾を吐きかけても飽き足らぬと思ひました。何しろのめのめと我々の前へ面つらをさらした上に、御本望ほんもうを遂げられ、大慶の至りなどと云うのですからな。」

「高田も高田じゃが、小山田庄左衛門おやまだしやうざえもんなどもしようのないたわけ者じゃ。」

間瀬久太夫が、誰に云うともなくこう云うと、原惣右衛門や小野寺十内も、やはり口を齊ひとしくして、背盟はいめいの徒を罵りはじめた。寡黙な間喜兵衛でさえ、口こそきかないが、白髪頭しらがをうなずかせ、一同の意見に賛同の意を表した事は、度々どどある。

「何に致せ、御一同のような忠臣と、一つ御藩ごに、さような輩やからが居おろうとは、考えられも致しませんな。さればこそ、武士はもと

より、町人百姓まで、いぬざむらい犬侍ろくぬすびとの禄盗人のと悪口あつこうを申して居るようでございます。おかばやしもくのすけ岡林杵之助殿なども、昨年切腹こそ致

されたが、やはり親類縁者が申し合せて、つめばら詰腹を斬らせたのだ

などと云う風評がございました。またよしんばそうでないにしても、かような場合に立ち至って見れば、その汚名も受けずには居お

られますまい。まして、余人は猶なおよさら更の事でございます。これは、

あだうち仇討あだうちの真似事を致すほど、義に勇みやすい江戸の事と申し、且かつ

はかねがね御一同の御おいぎどお憤りもある事と申し、さような輩を斬

つてすてるものが出ないとも、限りませんな。」

伝右衛門は、ひとごと他人事とは思われなような容子ようすで、昂然とこう

云い放った。この分では、誰よりも彼自身が、その斬り捨てるの任

に当り兼ねない勢いである。これに煽動せんどうされた吉田、原、早水、堀部などは、皆一種の興奮を感じたように、愈手いよいよひどく、乱臣賊子を罵殺ばさつしにかかった。——が、その中にただ一人、大石内蔵助だけは、両手を膝の上のせたまま、愈いよいよつまらなそうな顔をして、だんだん口数をへらしながら、ぼんやり火鉢の中を眺めている。

彼は、彼の転換した方面へ会話が進行した結果、変心した故朋輩の代価で、彼等の忠義が益褒ますまほめそやされていると云う、新しい事実を発見した。そうして、それと共に、彼の胸底を吹いていた春風は、再び幾分の温ぬくもりを減却した。勿論彼が背盟の徒のために惜んだのは、単に会話の方向を転じたかつたためばかりではない、彼としては、実際彼等の変心を遺憾とも不快とも思っていた。

が、彼はそれらの不忠の侍をも、憐みこそすれ、憎いとは思っていない。人情の向背こうはいも、世故せこの転変も、つぶさに味つて来た彼の眼まなこから見れば、彼等の変心の多くは、自然すぎるほど自然であった。もし真率しんそつと云う語ことばが許されるとすれば、気の毒なくらい真率であつた。従つて、彼は彼等に対しても、終始寛容の態度を改めなかつた。まして、復讐ふしゅうの事の成つた今になつて見れば、彼等に与う可きものは、ただ憫びんしやう笑しょうが残つているだけである。それを世間は、殺しても猶飽き足らないように、思つてゐるらしい。何故我々を忠義の士とするためには、彼等を人畜にんちくしやう生しょうとしなければならぬのであろう。我々と彼等との差は、存外大きなものではない。——江戸の町人に与えた妙な影響を、前に快からず思

つた内蔵助くらのすけは、それとは稍ややちがった意味で、今度は背盟の徒が蒙まもつた影響を、伝右衛門によつて代表された、天下の公論の中に看取した。彼が苦い顔をしたのも、決して偶然ではない。

しかし、内蔵助の不快は、まだこの上に、最後の仕上げを受ける運命を持つていた。

彼の無言でいるのを見た伝右衛門は、大おお方かたそれを彼らしい謙讓な心もちの結果とでも、推測したのであろう。愈いよいよ彼の人柄に敬服した。その敬服さ加減ひれきを披瀝ひれきするために、この朴直ひんじきむらいな肥後侍は、無理に話頭を一転すると、たちまち内蔵助の忠義に対する、盛な歎賞の辞をならべはじめた。

「過日もさる物識りから承りましたが、唐もろこし土の何とやら申す侍

は、炭を呑んで唾おしになつてまでも、主人の仇あだをつけ狙つたそうでございますな。しかし、それは内蔵助殿のように、心にもない放ほ埒うらちをつくされるよりは、まだまだ苦しくない方ほうではございますまいか。」

伝右衛門は、こう云う前置きをして、それから、内蔵助が濫らんこ行うを尽した一年前の逸いつぶん聞きを、長々としゃべり出した。高尾たかおや愛宕あたごの紅葉狩も、佯ようきよう狂きやうの彼には、どのくらいつらかつた事であろう。島原しまばらや祇園ぎおんの花見えんの宴も、苦肉の計に耽たつている彼には、苦しかつたのに相違ない。……

「承れば、その頃京都では、大石かるくて張はりぬきいし拔石などと申す唄も、流行はやりました由を聞き及びました。それほどまでに、天下を

欺おほき了おほせるのは、よくよくの事でなければ出来ませぬ。先頃あ天あ野まの弥や左ざ衛えもん門もん様が、沈しん勇ゆうだと御ご賞しょう美みになつたのも、至し極ごく道どう理りな事ことでございます。」

「いや、それほど何も、大した事ではございませぬ。」内蔵助は、  
不ふ承しょう不ぶ承しょうに答こたへた。

その人たかぶに傲たかぶらない態度たいどが、伝でん右う衛ゑもん門もんにとつては、物もの足たりないと同時に、一層いちじやうの奥おく床とこしさを感かじさせたと見みえて、今いままで内蔵助うちざうすけの方かたを向むかひていた彼は、永年えいねん京きやう都と勤きん番ばんをつとめていた小野寺おののてら十内じうちの方かたへ向むかひきを換かへると、益ます、熱心ねっしんに推服おしやくの意いを洩もし始はじめた。その子供こどもらしい熱心ねっしんさが、一党いちとうの中でも通人とうじんの名なの高い十内じうちには、可おほ笑わらしいと同時に、可かわい愛あいかつたのであろう。彼は、素直すなおに伝右衛門でんゑもん

の意をむかえて、当時内蔵助が仇家の細作を欺くために、法衣ろもをまとつて升屋ますやの夕霧ゆうぎりのもとへ通いつめた話を、事明細に話して聞かせた。

「あの通り真面目な顔をしている内蔵助くらのすけが、当時は里げしきと申す唄を作つた事もございました。それがまた、中々評判で、廓くわ中どこでもうたわなかつた所は、なかつたくらいでございます。

そこへ当時の内蔵助の風俗が、墨染の法衣姿ころもすがたで、あの祇園の桜がちる中を、浮うきさま浮うきさまとそやされながら、酔つて歩くと云うのでございましょう。里げしきの唄はやが流行つたり、内蔵助の濫行も名高くなつたりしたのは、少しも無理はございません。何しろ夕霧と云い、浮橋うきはしと云い、島原や撞木町しゅもくまちの名高い太夫たちたゆうで

も、内蔵助と云えば、下にも置かぬように扱うと云う騒ぎでござ  
 いましたから。」

内蔵助は、こう云う十内の話を、殆ど侮蔑されたような心もち  
 で、にがにが苦々しく聞いていた。と同時にまた、昔の放埒ほうらつの記憶を、  
 思い出すともなく思い出した。それは、彼にとっては、不思議な  
 ほど色彩あざやかの鮮な記憶である。彼はその思い出の中に、長蠟燭ながろうそくの  
 光を見、伽羅きやらの油の匂におぎ、加賀節かがぶしの三味線の音ねを聞いた。い  
 や、今十内が云った里げしきの「さすが涙のばらばら袖に、こぼ  
 れて袖に、露のよすがのうきつとめ」と云う文句さえ、春宮しゅんきゆう  
 の中からぬけ出したような、夕霧や浮橋のなまめかしい姿と共に、  
 歴々と心中に浮んで来た。如何に彼は、この記憶の中に出没する

あらゆる放埒の生活を、思い切つて受用した事であろう。そうしてまた、如何に彼は、その放埒の生活の中に、復讐の拳を全然忘却した駘蕩たる瞬間を、味つた事であろう。彼は己を欺いて、この事実を否定するには、余りに正直な人間であつた。勿論この事実が不道德なものだなどと云う事も、人間性に明な彼にとつて、夢想さえ出来ない所である。従つて、彼の放埒のすべてを、彼の忠義を尽す手段として激賞されるのは、不快であると共に、うしろめたい。

こう考えている内蔵助が、その所謂佯狂苦肉の計を褒められて、苦い顔をしたのに不思議はない。彼は、再度の打撃をうけて僅に残つていた胸間の春風が、見る見る中に吹きつくし

てしまった事を意識した。あとに残っているのは、一切の誤解に對する反感と、その誤解を予想しなかつた彼自身の愚に對する反感とが、うすら寒く影をひろげているばかりである。彼の復讐の拳も、彼の同志も、最後にまた彼自身も、多分このまま、勝手な賞讃の声と共に、後代まで伝えられる事であろう。——こう云う不快な事実と向いあいながら、彼は火の気のうすくなった火鉢に手をかざすと、伝右衛門の眼をさけて、情なさそうにため息をした。

それから何分かの後のちである。厠かわやへ行くのにかこつけて、座をは  
 ずして来た大石内蔵助は、独り縁側の柱によりかかつて、寒梅の  
 老木が、古庭の苔こけと石との間に、てきれき 的 たる花をつけたのを眺め  
 ていた。日の色はもううすれ切つて、植込みの竹のかけからは、  
 早くも黄たそがれ昏たそがれがひろがるうとするらしい。が、障子の中では、不  
 相変いかわらず面白おのずかそうな話声がつづいている。彼はそれを聞いている中  
 に、自らな一味の哀情が、徐おもむろに彼をつつんで来るのを意識した。  
 このかすかな梅の匂につれて、冴返ささえる心の底へしみ透つて来る寂  
 しきは、この云いようのない寂しきは、一体どこから来るのであ  
 ろう。——内蔵助は、青空に象ぞうがん嵌がをしたような、堅つめたく冷い花を

仰ぎながら、いつまでもじつとたたずイんでいた。

(大正六年八月十五日)

# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：野口英司

校正：もりみつじゅんじ

1997年11月17日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 或日の大石内蔵助

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>